義眼の男と口の悪い相棒

主義

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは木の葉の隠れの里にて『無敵』と言われた男と音隠れの里にてその『無敵』と言われた男に救われた少女の物語。

目次

多由也 ―― 1
買い物（前編） ―― 6

多由也

ボクは木の葉の里で『天才』だとは『無敵』だとか言われているが本当のところ、そんなことはない。天才であるならばこんな体になることはないだろう。ボクの左手は義手、右足は義足、左目は義眼。これは戦闘において受けた傷。ボクがもし、天才であったならば無傷で帰ることも出来ただろうに。

だからボクは天才でも無ければ完璧超人でもない。

ボクは任務を終えて自分の自宅の前に着くと深呼吸をしてドアを開けた。

「帰ってくるのが遅いんじゃねぇのか、クソ野郎！」

玄関には赤い髪をした少女が出迎えてくれていた。この子の名前は多由也。元は音隠れの里の子供。

　この子はボクが他里を旅していた時に拾った子。出会った時はとても言葉遣いが良かったんだけど気を許すようになったのか口が悪くなっていた。別に個人的には口が悪かったとしても問題ないと思っているから注意をしていない。

「ごめんね。話し合いが長引いちゃってね」

「ウチが食事を作って待っているのを知ってて遅くなったわけじゃないろうな！」

「憶えてたらボクは早く帰って来てたよ。君の料理は絶品だからね」

　出会った時は食事を作ったことなんて一度もしたこと無かったらしいけど教えるとすぐにマスターしてしまい、すぐにボクの腕を通り越した。

「そ、そうか。それなら次からは早く帰ってくれよな」

「分かったよ」

ボクは彼女の頭に自分の手をのせて数分の間、撫でた。彼女は振り払うこともなくボクが撫でている間は静かでボクが撫でるのを止めると彼女はボクを見上げた。。この形だと彼女から上目遣いを受けている感じなのだ。そしてボクはこの子の上目遣いに弱い。

分かったよと口にして撫でるのを再開した。彼女は撫で始めるとまた静かになった。

そして食事を食べ終わるとボクと多由也はお互いに今日あったことを話した。これはいつもの日課でボクと多由也は今日あったことを報告する。任務を行う時はなるべく一緒にしてもらうようにはしているがそれも絶対ではない。だからこそ、別行動の日は情報交換をしている。

多由也と知り合ってからもう十年近くの年月が経過している。だからお互いのこと

は癖から好きな物まで何でも知っている。他人を理解するにはまずはその人の好きな物などを理解する必要があるからね。

「多由也と知り合ってもう十年か」

「何だ、気持ちわりぃ！思い出に浸るところなんて…気持ちわりぃんだよ!!!」

「まだ思い出に浸るには早いけど……ちょっと思い出してね」

　この子は元々、捨て子という形で音隠れの里にいた。別に同情したわけじゃないが…自分という同じ境遇の子供を見て見ぬふりも出来なかった。両親、身内が居ないものがどれだけこれからの人生で苦労するのかを知っている。だからボクは多由也を拾う事にした。

「ウチらの旅はまだ終わらねぇんだからそんな辛気臭いことを言うんじゃねぇよ!!!ノミ

虫が！」

「まあ、それもそうだね。ボクたちはまだこれからだからね」

今日もそんな風な会話を繰り広げながらボクと多由也の一日が終わっていく。

買い物（前編）

今でも考える事がある。多由也を音隠れの里から拾ってきたのは本当に良かったのだろうかと思ってしまう。彼女に取ってあそこは故郷であり、生まれ育った場所だった。そこをボクの一存で彼女を連れだしてしまった。もしかしたら彼女はあそこに居たかったのかもしれない。

そこを無理矢理連れ出してしまったのは間違いだったのではないかと……だからいつかは多由也を元の居場所に戻してやるのも彼女を連れだしたものとしての責任だと考えている。それを彼女が望んでいるのかは未だ定かじゃないが…多分望んでいるだろうからね。

今日は珍しくお互いに休暇だったので二人で買い物に来ている。多由也は人との付き合いがお世辞にも上手とは言えない。すぐに口が悪くなってしまうし、好んで誰かと

仲良くしようと多由也も思っていない。いつかはその性格は直して欲しいと思っているけど……すぐに治るものではないので徐々に治って行けば良いけどね。

「今日は何を買うんだっけ?」

ボクの左隣を歩いている多由也の方を見つめながら言った。

「もう忘れたのかよ!!クソ野郎!ウチらが買い物に来たのは食事の買い出しと昨日、クソ野郎が壊した皿を買いに来たんだろうが!そのついでに新しい雑貨を見て行こうかって、言ったんじゃねぇか!!」

「あ…そうだったね。ごめんね。それで最初はどこに行く?」

「食材は最後に回した方が良いだろ。まずは雑貨でも見に行くか」

「そうだね。それじゃ行こうか！」

ボクは左隣にいる多由也の右手を掴んでボクは歩き出した。だけど…一向にボクは前に進めない。何故ならば、多由也が立ち尽くしたまま動こうとしない。

「どうしたんだい？具合が悪いか？もし、体調が優れないのならまた買い物は次の機会にしようか」

彼女の顔は見る感じ、いつもより少し赤いかもしれない。もしかしたら、熱があるのかもしれない。

「帰ろうか!!まずは家で休もう」

「……いや、別に大丈夫だ、てめぇが急に手なんか繋ぐからだろうが」

「そうかい…ダメそうになったらすぐに言うんだよ！ボクは君を無理させてまで買い物を続ける気はないからね」

「大丈夫だって言ってだろ!!早く行くぞ!!」

「分かったよ…」

雑貨屋に着くと…皿や家具など色々なものがあり本来の目的を忘れそうになってしまうほどだ。ボクが他の物に目移りしそうになっていると…耳を引っ張られた。ボクの耳を引っ張る人物は見なくても誰だが分かる。絶対に多由也だ。

「てめぇが皿を壊したんだから、てめぇが代わりの物を見つけるんだよ!!ノミ虫」

「わ、わかったから、耳を放してくれないかな?」

ボクは多由也に耳を引っ張られながら目的の場所へと連れてかれた。

「え…これも…良いね。いや、こっちも良いね。やっぱりこういうのはボクに向かないよ。多由也も知ってるだろう?ボクはこういうのを決めるのに凄い時間が掛かるって」

「はぁ……仕方ねぇな」

そう言うと多由也は棚の中に置かれているお皿を一通り見ると決めたようだった。彼女はボクと違って何事も好き、嫌いがはっきりしているし、決めるのもとても早い。

「これが良いんじゃねぇか？前のとは少し違うがてめぇはこういうデザイン好きだったろ？」

「よくボクの好みが分かるね？確かにこういうデザインが好きなんだよ」

「てめぇとどれだけ一緒に暮らしてきたと思っているんだよ！」

「まあ、そう言われればそうだね。それじゃこれを買う事にしようか」